

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第20回)

ハーディの郷

トマス・ハーディという小説家は、イギリスを代表する大文豪と言ってもよく、かつては日本のたいていの大学の英文科で「卒論人気作家」の一人だった。最近の学生はあまり興味を持たないようで卒論で扱う件数が減り、少し寂しい気もするが、それでも、ナスターシャ・キンスキー主演の映画『ダーバヴィル家のテス』は結構見ている者も多いようだ。数奇な運命に弄ばれて不幸な人生を送った女主人公テスが、古代遺跡ストーン・ヘンジの石の上で逮捕されるラストシーンは圧巻である。ただし、ストーン・ヘンジは現在ではイングリッシュ・ヘリテッジの管理下であって石の上に乗ることはできないので、どうぞ真似などなさないように。

ハーディはイングランド南西部のドーセット州出身で、多くの小説をこの地方を舞台にして書いた。州都ドーチェスターを訪ねると、ハーディの生家だけでなく様々なゆかりの場所を見ることができる。よく、ロンドンなどの街中で、歴史上の有名な人が住んでいた建物の正面に「かつてこの家に〇〇が住んでいた」と書いてある青い円盤状の看板（プラーク）が掲げられているのを目にすることがあるのだが、ドーチェスターでもそういうプラークに目が留まって思わず笑ってしまった。目抜き通りのパークレイ銀行の建物に掲げられたもので、「ここにかつてカスターブリッジの市長

が住んでいた」と書いてある。「カスターブリッジの市長」とは、ハーディの同名の小説の主人公のことだが、もちろんフィクションで、実在したわけではない。が、物語の中で、確かに市長の家はこの場所に設定されている。わざわざプラークで示すとはなんともオシャレな街だ。

この街でパブに入れば、まず飲むべきビールはその名もずばり「トマス・ハーディ」。とにかく、街中いたるところでハーディの息吹が感じられる。少し足を延ばして『ウェル・ビラヴィッド』という小説の舞台になった港町ウェイマスまで来た時に、「T.H.」というイニシャルの刻まれた大きなモニュメントを見つけた。あ、またトマス・ハーディだと思い、英文学学徒の自覚をもって、記念写真を撮った。しばらくこの地域を旅するうちに、思わぬ事実を知ることになった。どうやらドーセット州にはトマス・ハーディという同姓同名の歴史的有名人が3人いるらしい。文豪と教育学者と海軍将校の3人である。港のモニュメントは海軍将校を記念したもののようなのだ。なんとも間抜けな記念写真になってしまったが、ハーディ文学の真髄は「数奇な運命に弄ばれる人間」なので、これもまた然り、かな。